

中村道場 型競技 採点方法&採点基準

【試合の進行】

- ① 選手は、呼出された後、試合場に一礼して入場。開始場所に立つ。
- ② 主審の「正面に礼」の号令で礼を行う。
- ⑤ 主審が右手を挙げて開始の合図を行う。
- ⑥ 選手は演武する型名を発声し演武を行う。
- ※「用意」「始め」「号令」などの付随する言葉は発声しない。
- ⑦ 演武を終えた選手は姿勢を正して終了場所に立つ。
- ⑧ 主審の「判定をお願いします。判定」の号令で副審は得点を揚げる。
- ※記録係りは、主審から右回りに副審の得点を確認する。
- ※記録係りは、最高得点と最低得点を除いた3人の審判の合計点を計算する。
- ⑨ コート担当者が得点を発表する。
- ⑩ 主審が「正面に礼」の号令をかけ、退場を促す。
- ⑪ 選手は主審の合図で退場する。試合場を出るときは一礼を行う。
- ⑬ 全ての選手の演武終了後、順位が発表される。
- ※試合進行の流れで、審判が先に退場した後、順位発表を行う場合もある。

【採点方法】

- ① 5人の審判で採点を行い、最高得点と最低得点を除いた3人の審判の合計点によって競い合う。
※3審制の時は、3人の審判の合計点によって競い合う。
- ② 基準点は6点。加点・減点で採点を行う。上限を9点とし、下限を3点とする。
※完璧な演武者が出れば、10点満点も可能。
- ③ 加減の単位は、0.5ポイント刻みとする。
- ④ 同点の場合、以下の優先順位で勝敗を決める。※3審制も同じ。
 - 1、最低点の高い選手。(5審制の場合、5人の審判の中での最低点)
 - 2、最高点の高い選手。(5審制の場合、5人の審判の中での最高点)
 - 3、主審の得点が高い選手。
 - 4、予選の型試合を行うカテゴリーの選手は、予選型での採点が高い選手。それでも勝敗がつかない場合は、再度、型演武を行い、旗判定で決める。

【採点基準】

<具体的な採点ポイント>

以下の項目を採点の目安とし、得点を出す。

それぞれの項目内容の度合いにより、0.5ポイント、1ポイント刻みで評価、加減を行い採点数を合計、得点結果を出す。

基準点6点前後に採点が集中しないように、9点から3点まで、振り幅を大きく行い、各審判の中で、それぞれ順位を付けるような採点を行い、最終的に各審判の合計得点で競い合う。

～減点ポイント～

「動作」

- ①入退場、試合場内での礼法・立ち居振る舞いが悪い。
 - ②動きを飛ばした場合。
 - ③著しくバランスを崩した場合。
 - ④動作の間違い。
 - ⑤立ち方、握りや手刀等手先、引手の精度が悪い。
 - ⑥中足、足刀等足先に関しての精度が悪い。
 - ⑦移動（運足）時のバランスの崩れ、二度踏み、継足、盗み足等をする。
 - ⑧姿勢が悪い、腰が高過ぎる、低過ぎる、前傾になりすぎ。
 - ⑨必要以上にタメを作ったり、逆に速過ぎる場合。
- ※それぞれの型の解釈があるので、明らかに理合いに反した場合に適用する。
オーバーアクションなどがここに該当。
- ⑩目付が出来ていない、技の理合いとして不自然。

「気合」

- ⑪気合の入れ忘れや、発声（挨拶・型名・気合）が極端に小さい場合。
- ※ただし、幼年や小学生低学年などのカテゴリーは、声が小さいので、出場している選手の相対的な基準で判断を行う。

「場外に関して」

- ⑫試合場から足が出た場合。（使用コートが小さい場合はこの限りではない）
外側のマットに片足が出た場合。
外側のマットに両足が出た場合。

～加点ポイント～

- ① 重心が安定して立ち方、移動（運足）が優れている。
- ② 技のスピードが速い。
- ③ 技の動きが力強い。
- ④ 全体的な型の流れに緩急、強弱が整っている。
- ⑤ 気合、発声に迫力があり（声が大きいいだけではない）、息の調節、呼吸動作が優れている。
- ⑥ 型全体の構成・完成度が優れている。
- ⑦ 技の繋がりがすぐれている。
- ⑧ 余計な動作、乱れた動作がなく、連絡動作が優れている。
- ⑨ 跳躍が高い。
- ⑩ 一つ一つの技が正確かつ術理に秀でている。
- ⑪ 片足での安定感が優れている。
- ⑫ 立ち方、握りや手刀等手先、引手の精度が優れている。
- ⑬ 中足、足刀等足先に関しての精度が優れている。
- ⑭ 蹴り足が高い。
※ただし、あくまでも理合いに基づいた高さ。高ければ良いわけではない。
- ⑮ 目付が優れている。
※ただし、オーバーアクションは不可。

<減点及び失格>

- ① 口頭で言う型名と実際に行った型が違う場合。演武した内容から、減点として各審判1点を引く。
- ② 間違いに気づき、やり直した場合、中止してしまった場合。型を失念した場合、間違いの收拾がつかなくなり主審が止める、又はアドバイスをする場合。

※補足

上記の演武に関しては、失格相当としつつも最後まで演武は行ってもらい判定をとる。その場合、下限の3点より低い2点とする。

- ③ 審判の指示に従わなかった場合。

【流派の違いからくる型の解釈に関して】

流派・他派閥の違いから生じる動作の相違、気合の入る箇所相違などは、「間違い」として捉えるのではなく、空手の本質的な動き（力の強弱・技の緩急・息の調節に象徴される型の流れ、技の精度）を見て採点を取るようにする。

「間違い」なのか「動作の相違」なのかは、試合場にて、選手の資質・状況を見て、審判の判断に委ねる。

※必要に応じて、採点前に、審判団、コート責任者が集まり、協議する場合もある。

ただし、本大会は、極真空手の大会であり、ここで言う「空手の型」とは、あくまでも普遍的な極真空手の型の動きをベースに採点を行う。

【補足】

<型試合の採点の方向性>

中村道場の型は、中村総帥の型に見られるように、ダイナミックかつ実戦で使える力強さを求めていますので、細々とした減点を取るより、加点重視の採点を推奨しています。

この方法により、迫力ある型試合の攻防が展開されるものと考えております。

また、加点重視により、【流派の違いからくる型の解釈に関して】も、表現違いの粗探しをする必要も少なくなるので、違う解釈の動きも公平に採点できるものと考えます。

<各審判の採点基準について>

各審判はそれぞれのキャリアを持った、空手の有段者です。

それぞれが、選手の動きを採点致しますが、一人の審判は空手の術理を見る場合、一人の審判は、技の正確さを見る場合、一人の審判は型全体のダイナミックさと演武の構成を見る場合、などと各審判の空手観に基づいた、視点が違う見方での採点を推奨しております。

各々の採点する着眼点が違うので、時には同じ演武者に対して各審判の点数がバラツいて出てくるのはこのような理由からです

それぞれの着眼点で、全演武者を統一した評価で採点を行い、それぞれの審判の中で順位を付けて頂き、最終的にその3人の審判の合計得点で競い合う採点方式となります。

こうする事により、多角的な見方から全体評価が生まれ、その結果として、技術面、武術面、芸術面（表現力）などの総合評価から順位が生まれる方法論で型試合を行っております。

※ただし、フィギアスケートのジャッジの様に、各審判が、どの様な基準で採点を見るかの具体的設定は行っておりません。